

京都府舞鶴市

CLOSE UP
人づくり⑦

舞鶴市からは〈図表1〉のとおり、例年、七名前後の職員が全国建設研修センターの研修に参加されている。同市は京都府の北部、日本海に面し、東京都小平市にある当センターにはJRで一旦京都に出て五時間強の行程となる。こうして遠路よりコンスタントにお越しいただいている理由などもお聞きしよう、七月一日に舞鶴市を訪ねた。



舞鶴市庁舎

舞鶴市のプロフィール —多彩な地域資源を活かして—

舞鶴市の人口は約八万六〇〇〇人。その市街は、五老岳によって東地区(東舞鶴)と西地区(西舞鶴)に分かれ、それぞれ異なった歴史の顔を持つ。東舞鶴はかつての軍港都市。一方、西舞鶴はかつての城下町で、安土桃山時代に築かれた田辺城跡や当時を偲ぶ古い町並みが今も残る。

市庁舎は東舞鶴にあり、周辺には旧海軍ゆかりの赤れんが倉庫群が建ち並ぶ。この若狭湾に面したエリアは「赤れんがパーク」と呼ばれ、倉庫群は歴史遺産として保存するだけでなく、博物館や記念館へ転用したり、ライブイベントやアートスペースとして活用するなど、近年では新たな空間スペースとしても注目を集めている。

また、ほど近くには、「岸壁の母」の歌でも知られる戦後の海外引揚事業やシベリア抑留などの歴史を展示した舞



旧海軍が築いた赤れんが倉庫群一帯は「赤れんがパーク」として整備されている



引揚棧橋
引揚の史実は、ユネスコ世界記憶遺産の国内候補に

〈図表1〉舞鶴市のセンター研修参加状況

【平成23年度】 7名

研修名	期間(日)
品質確保と検査	5
用地基礎	11
道路管理一般	10
建設プレゼンテーション・スキル	3
コンクリート構造物の維持管理・補修	3
用地関係法規	5
都市計画	5

【平成24年度】 9名

研修名	期間(日)
用地基礎	11
建築設備(衛生)	5
公共工事契約実務	3
品質確保と検査	4
道路管理一般	10
アセットマネジメント	3
橋梁維持補修	5
鋼橋設計・施工	3

【平成25年度】 6名

研修名	期間(日)
公共工事契約実務	3
品質確保と検査	4
用地基礎	11
道路管理一般	8
官民連携 (PPP/PFI)	5
建築設備 (電気)	10

(注)平成24年度の「用地基礎」には2名が参加。

目指す「組織像」 市民に信頼され、市民の役に立つ市役所

Ⅰ市民の中に入って、地域の課題を見つけ、市民とともに考え、解決に向け積極的に行動する職員

地域で何が起きているのか、市民の皆さんは、何を望んでおられるのかを的確に把握し、課題の解決に向けて市民の皆さんとともに知恵を絞り、汗をかくことができる職員を目指します。

目指す「職員像」

Ⅱ職員一人ひとりが、専門性や得意分野を持ち、自らの特性も最大限に発揮し、市民の信頼に応える職員

職員一人ひとりがプロフェッショナル意識を忘れず、豊富な知識に基づいて、市民の皆さんに適切なアドバイスや求められるサービスを提供することができる職員を目指します。

Ⅲ社会情勢の変化に即応した改革意識を持ち、仕事への情熱と柔軟な思考のもと、市役所と仕事を改革できる職員

前例踏襲にとらわれず、舞鶴市全体にとって何が最適かという観点から、より高い成果を目指して、市役所と仕事の改革に挑戦し続ける職員を目指します。

<図表2>舞鶴市人材育成基本方針に示された目指す組織像・職員像



目指す組織像・職員像は市庁舎ロビーにも掲示されている

住民満足度を最優先した 人材育成基本方針

平成二四年三月に策定された舞鶴市

待されており、今夏には舞鶴市を中心に日本最大の海の祭典である「海フェスタ京都」も開催される。また、今年度は京都縦貫自動車道、舞鶴若狭自動車道が全線開通して、中国自動車道、名神高速道路および北陸自動車道が一つとなって近畿・東海・北陸地方の広域ネットワークが形成され、舞鶴市へのアクセスは格段に向上した。この追い風を活かすには、市長が語るように、舞鶴ブランドをどう磨き上げていくか、そのための戦略的なまちづくりが求められている。

の人材育成基本方針は、市役所とはどのような組織でなければならないのか、職員に求められることは何なのかを、市民アンケート調査の結果などをもとに検討され、〈図表2〉のとおり、住民満足度を高める市政づくりを最優先にして、目指す「組織像」、「職員像」がまとめられている。この基本理念は庁舎の玄関ロビーにも掲示されており、川端常太職員課長は「市民に約束する共通の目標として、進むべき方向に間違いがないか、何を補わなければならないかを見つめ直すとともに、日々の職務を通じて接する市民の声を、職員一人ひとりが我が身を映す鏡とするため」と、その意図を話す。

また川端課長は、目指す「職員像」のBに示された職務における専門性を高める取り組みとして、職員研修の充実を挙げ、最新の技術や知識が習得できる全国建設研修センターをはじめとする外部研修にも積極的に参加させたいという。そして、「その成果は職場全体で共有することが大切で、それが組織力アップにつながる」と述べた。

センター研修に対する評価・要望

センター研修への派遣者は、職員課

鶴引揚記念館があり、今年六月、その収蔵資料がユネスコ世界記憶遺産の国内候補に決定し、大きな話題となった。これらの歴史的資源や、若狭湾をはじめ豊かな自然に恵まれた舞鶴のまちづくりについて、多々見良三市長は「多彩な地域資源は舞鶴の宝（ブランド）であり、今後もこれらを最大限に活用した取り組みを進めることによって、

まちはますます元気になり、将来に向かって夢や明るい展望が開けてくる」と、市勢要覧で述べている。関西経済圏における日本海側唯一の重要港湾である京都舞鶴港は、平成二二年に国直轄事業を重点的に実施する重点港湾の指定を受けた。国内はもとより、東アジア地域とのゲートウェイとして更なる経済交流、観光振興が期

待されており、今夏には舞鶴市を中心に日本最大の海の祭典である「海フェスタ京都」も開催される。また、今年度は京都縦貫自動車道、舞鶴若狭自動車道が全線開通して、中国自動車道、名神高速道路および北陸自動車道が一つとなって近畿・東海・北陸地方の広域ネットワークが形成され、舞鶴市へのアクセスは格段に向上した。この追い風を活かすには、市長が語るように、舞鶴ブランドをどう磨き上げていくか、そのための戦略的なまちづくりが求められている。

の人材育成基本方針は、市役所とはどのような組織でなければならないのか、職員に求められることは何なのかを、市民アンケート調査の結果などをもとに検討され、〈図表2〉のとおり、住民満足度を高める市政づくりを最優先にして、目指す「組織像」、「職員像」がまとめられている。この基本理念は庁舎の玄関ロビーにも掲示されており、川端常太職員課長は「市民に約束する共通の目標として、進むべき方向に間違いがないか、何を補わなければならないかを見つめ直すとともに、日々の職務を通じて接する市民の声を、職員一人ひとりが我が身を映す鏡とするため」と、その意図を話す。



小島建設部長（前列中央）をはじめ、お話を伺った職員のみなさん

でまとめるのではなく、建設部と指導検査室が人選している。建設部では、ある程度課題が見えてくる、職務に就いた二年目に参加させるのを原則としている。指導検査室では、品質や安全などを検査・指導する即戦力が求められるため、『品質確保と検査』、『公共工事契約実務』等の研修に異動してきた職員から順次派遣しているということだ。

建設部では、用地買収を行っている建設総務課と国・府事業推進課から『用地基礎』に、土木課の管理部門から『道路管理一般』と『用地関係法規』に毎年のように派遣いただいている。また

技術関係では、現場が始まる前には必ず関連する研修に派遣しているということだ。例えば、近年メインとなっている維持管理関係や、もうすぐメタルの長大橋をかけることから、昨年度は『鋼橋設計・施工』にも派遣した。この点について、小島善明建設部長は「例えば鋼橋でも、私どもで情報収集して指導することもできますが、どうしてもパーツごとの指導になってしまします。その点、センター研修は設計、施工から監督まで抜け落ちがなく、すべてのパーツを学ぶことができ、現場に出たときに学んだことと実践がうまくリンクするんです」と話す。そしてこの発言には、「現場が減っている中でも、若手のエキスパートを育てなければならぬ」という思いも強くあるようだ。

センター研修に対する要望としては、指導検査課の竹内章二主幹から「今はいろいろな技術が入ってきて、何が基本なのかかわかりにくくなっています。技術者として押さえておくべき基本を学べる研修が必要」との指摘があった。また、小島建設部長も同様の意見で、基本的な技術の理解不足を懸念している。「公共建築は在来工法を使うことがまだ多く、かなり現場を知っているの

ですが、土木系は製品施工が増えてきて、型枠の組み方やコンクリートの打ち方を知らない職員も増えています。基礎的な現場が少なくなっていますので、そういう実地体験なども合わせた基礎的な研修」を要望した。

センター研修を受講した感想

終わりにセンター研修の感想や評価などについて、受講されたお三方からコメントをいただいた。

平成二一年に『橋梁維持補修』を受講した土木課の川原田健剛さんは、いまから維持管理が大事になるので、だと上司に声を掛けられたのがきっかけだった。「それまでつくるのが主だったので、維持管理といってもぴんと来ないところもありましたが、その意識が大きく変わった研修だった」と振り返る。それ以来、橋梁保守を担当し、研修で得た知識は時間が経ってもプラスになっているという。

由良川の河川整備に携わり、『用地基礎』を昨年受講した国・府事業推進課の山口善弘さんは、何よりもグループ討議が印象に残っているという。「例えば、神社庁にも登録されていない神社の土地の整理について、私が疑問を投



取材後にまもなく開催された「海フェスタ京都」(7/19~8/3)

げかけると、大都市の方からみればその疑問がすごく新鮮だったり、逆に商店街の道路の拡幅に関することなどは私にとって新鮮だったり、本当に得ることが多かった」と話した。

建築住宅課の羽賀博昭さんは昨年度、設備職で採用されたばかりで、『建築設備（電気）』を受講した。「設備職は機械と電気があり、私はどちらかという機械の方が専攻で電気は素人でした。それでも大まかな知識を得ることができ、今後の勉強のきっかけづくりになった」と話す。そして、今でも仕事で疑問点があれば、研修テキストを取り出して確認しているという。